

平城京朱雀大路 設定規格の再検討

710年に藤原京からの遷都が挙行された平城京は、奈良盆地の北端域の起伏に富んだ地形上に人工的に建設された都城であった。この条坊都市・平城京の地割計画の中軸線が朱雀大路であること、そして、朱雀大路は平城京建設以前から奈良盆地を南北に直線に縦貫していた下ツ道の位置を踏襲して設定されたものであったことも、数次におよぶ発掘調査で確認されている。

朱雀大路の設定規格については、私自身、かつて異なった理解を開示してきた。1984年の時点では、1974年に実施された六条付近での発掘調査¹⁾をもとに、「(側溝は)流水等の影響による浸食が著しく、しかも東・西側溝が70m近く南北に隔たった地点で検出されたものであることなどから、本来の幅員を確定しがたい」と前提した上で、側溝心間距離を200大尺(復元推定値70.96m)²⁾と推量し、その外側に遺存する地割線の間隔が「約90m」であることから、これを築地痕跡とみため、築地心間距離250大尺(88.70m)と推定した³⁾。

その後、さらに遡る1968~1970年にかけて実施されていた羅城門と周辺の九条大路関連遺構⁴⁾の再検討を通じて、調査報告当時復元されていたよりも羅城門の東西規模が大きかったことを明らかにした作業の中で、羅城門の北西方で検出されていた朱雀大路の西側溝および西側の築地塀とその下層に確認された掘立柱塀の位置をもとにして、従前の私見を修正して、朱雀大路の規模を側溝心間で210大尺(74.51m)であるとし、築地塀心間の

規模は250大尺とした(図54)⁵⁾。この210大尺という寸法は、平城京条坊道路の中で朱雀大路に次いで大規模に設定されている二条大路105大尺(37.25m)のちょうど2倍であり、あるいは藤原京朱雀大路70大尺(24.84m)の3倍でもあることになり、条坊設計のありようを考える上で重要な知見であると位置づけた(図55)。また、平城京造営に際して、他の多くの形制上の要素を模範として導入した唐長安城の南北中軸をなす道路である朱雀街が幅150ないし155mであると報告されている⁶⁾ことを徴すると、75m弱という朱雀大路の規模が、ほぼ2分の1であることは偶然ではないと思われる⁷⁾。

さて、その後、朱雀門前の朱雀大路が国史跡に指定されたことを受けて、史跡地の公有化が進められ、奈良市教育委員会によって数次の発掘調査がおこなわれた。またその成果に基づいて実施された史跡整備が竣工し、調査・整備報告書が刊行されている⁸⁾。

朱雀門南の平城京三条では朱雀大路の路面部分の大半と東側築地塀を含む広い範囲の遺構状況が明らかにされたが、そのうち、三条条間北小路との交会点周辺の状況が確認された奈良市教委第119次調査では、下ツ道の東・西側溝、朱雀大路の東側溝・東側築地などが一連の調査範囲の中で検出された(図56)。下ツ道の側溝は、西側溝が幅3.1~3.4m、東側溝が1.8mであり、側溝心間距離は22.5mほどある。この下ツ道道路中軸線を基準にして朱雀大路東側溝の心まで距離をとると約37.4mとなる。したがって、これを2倍にした東西両側溝心間距離は74.8mということになり、従来復元してきている210大

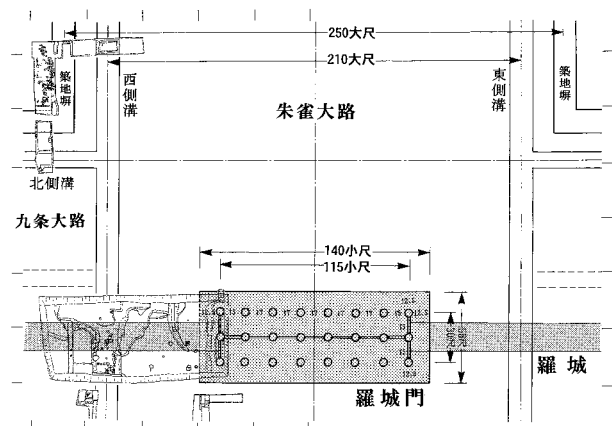


図54 羅城門付近での朱雀大路

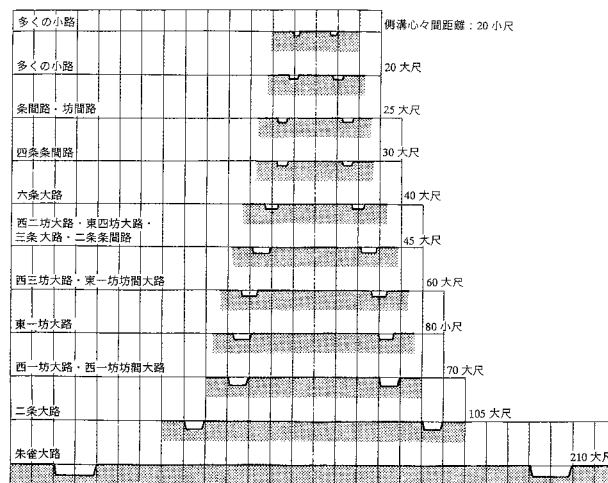


図55 平城京条坊道路の規格

る施工ミスによるものでなく、旧下ツ道の影響を受けたものと考えられ、壬生門、若犬養門が正確に条坊基準線上に設定されているのは、朱雀門より着手時期が遅れたためと考えられる。

上記の見解には不可解な点がいくつかある。まず①についてであるが、六条での朱雀大路の調査で検出された遺構は、報告書Aも引用するように、「東西の両側溝は、それぞれ6～7m」、「溝心間73.4～74m」であり、溝岸はかなり浸食をこうむり、直線的に遺存しているわけではない。こうした不安定な遺構の遺存状況のもとで、本来の道路中軸線のポイントを1cm単位まで正確に把握することは困難と考える。また朱雀門付近で朱雀大路の中軸線が下ツ道の中軸線の東1.6mにあるというのは、なにを根拠にして算出した数値であるのか判然としないが、報告書Aに付載されている国土座標表(図57)にしたがえば、朱雀門のすぐ南での朱雀大路の中軸線の位置(平城第130次・143次調査:a・b間)は $Y=-18584.0$ であり、朱雀門の北側での下ツ道中軸線(平城第16次調査:ロ・ハ間)は $Y=-18587.1$ となる。この2地点は南北に約61mへだたっているものの、造営方位の振れ($N0\ 15\ 39\ 'W$)を考慮しても0.3m程度間隔が狭まる程度であるので、両中軸線の間は2.8mという数値になり、ずれは1.6mよりも大きかったということになる。

しかし、実はこれも疑わしいと言わなければならない。同じ調査地点について、注8報告書では、異なった国土座標調査(西側溝a: $X=-146009.86\ Y=-18622.500$ 、東側溝b: $X=-146006.210\ Y=-18548.640$)が掲げられている。この場合、両地点の中点のY座標は -18585.57 となる。今般再検討するに際して原実測図で再測定したところ、後者の数値が妥当であることを確認した。しかし、それでも疑問が残される。このa、b地点と朱雀門心の南北距離は13.5mであり、東西方向の相互位置関係を検討する場合、造営方位の振れは、ほとんど考慮する必要ない(計算上では6.1cmほどの差異が生じる)。したがって、朱雀門心はa、bの中点、つまり朱雀大路の中軸線の西約0.7mにあることになる。南北距離が短いので、必ずしも信頼できる数値とは言えないものの、この2地点間の方位の振れは $N2\ 58\ 06\ 'W$ と過大であり、報告書Aのいうように、朱雀門は朱雀大路の中軸線から若干ズレた位置に設定されているという判断を導かざるをえないことにな

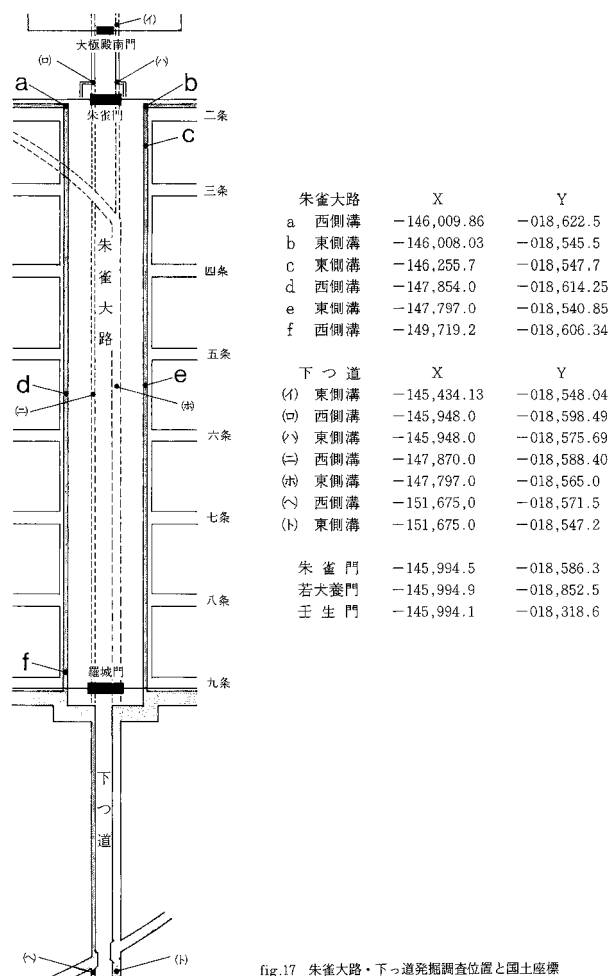


図57 報告書A「朱雀大路・下ツ道発掘調査位置と国土座標」

る。しかし、朱雀大路全体で90m近くにも及ぶ規模のなかにあって、0.7mというズレが、果たして、平城京の都市計画の基本的な枠組みの中で、何らかの具体的な要因でズレを生じさせることとなったというほどの距離であろうかとの疑念をぬぐいきれない。

なおさらに、より南での奈良市教委第119次調査で確認された下ツ道東西両側溝の中軸線、そしてその地点から朱雀大路東側溝までの距離をもとにして復元した朱雀大路の設定規格の妥当性を考え合わせると、a、b両地点の中点の位置が異常であることを指摘しなければならない。つまり、a、b地点よりも153m南にある第119次調査地での下ツ道の中軸線(そして同時に朱雀大路の中軸線)のY座標は -18585.82 (注8報告書の国土座標表から算出)であり、a、bの中点よりも西に位置していることになり、北で西に振れている平城京の造営方位とは逆になる。ちなみに第119次調査地での下ツ道中軸=朱雀大路中軸と朱雀門心との方位の振れをみると $N0\ 10\ 19\ 'W$ となり、より妥当な傾向を示していることがわかる。つまり、a、

b地点での朱雀大路東・西側溝の位置は、周辺の条坊遺構の中で異例の位置関係を示しているのである。この原因として、座標値を、より子細にみると、とくに東側溝bがやや西に強く片寄っていることが挙げられるが、それが事実であるとすれば、あまりに変則的な設定状況であることになる。あるいは、調査時点での測定の数値に錯誤が存在する、という可能性もあるが、この点は検証がきわめて困難である。しかし、そのことを別にしてもなお、前述したいくつかの周辺の状況分析に立脚すれば、先に紹介した報告書Aでの所見①は、成立しがたい問題をはらんでいると考える。

次に②であるが、ここで指摘されている、朱雀門の位置が朱雀大路の中軸線の西80cmにあるという所見は、朱雀門と平城宮南面西門である若犬養門の心間距離が266.17m、朱雀門から南面東門である壬生門の距離が267.76mであることから、その差が約1.6mであるという計算からみちびかれたものであり、「すなわち、壬生門、若犬養門は（朱雀門ではなく―井上注）朱雀大路の中軸を基準にして東西に振り分けられた」とする。

ここで問題とするべきは、まず若犬養門～朱雀門の心間距離266.17mである。両門は造営計画上、750大尺（＝900小尺）の間隔を置いているので、この場合、1小尺＝0.2957mという尺長であることになり、まったく妥当な数値というべきである。ただし、不審なことに、若犬養門の調査では、報告文にも、「基壇は著しく削平されており、礎石はもちろん根石も残っていなかった。（中略）基壇外装の痕跡もなく、直接に基壇の規模を示す資料は得られなかった」と記述するように、7ヵ所で確認した礎石据え付けのための不整円形の基礎地業の位置から門建物の規模を復元しているにすぎない。このような遺構状況から266.17mという精緻な計測値を求めることはおよそ困難なこととみなさなければならない。また朱雀門～壬生門の間隔であるが、267.76mであるとする、1小尺＝0.2975mとなり、平城宮造営当初の基準尺長としてはあまりにも過長である。壬生門の調査では、門基壇の掘り込み地業が検出されているものの、必ずしも整った平面形状ではなく、中心点をcm単位まで求めることは、ここでもまた不可能であると考え。したがって、②および③で示された判断はいずれも成立しがたいのである。

（井上和人）

注

- 1) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』（奈文研編集）1974。
- 2) 平城京造営当時の基準尺長については、今のところ1小尺が0.2950～0.2963mという発掘調査による知見が得られており、設定寸法の試算には、この中間値である1小尺＝0.2957cmを、したがって1大尺＝0.3548cmを援用することにして（井上和人「平城宮造営尺長について」『年報2000―III』2000）。
- 3) 井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集VII』1984。
- 4) 大和郡山市教委『平城京羅城門跡発掘調査報告』（奈文研編集）1972。
- 5) 井上和人「平城京羅城門再考」『条里制古代都市研究14』1998。
- 6) 中国社会科学院考古研究所西安唐城発掘隊「唐代長安城考古紀略」『考古1963―11』1963。なお、この報告によれば、長安城朱雀街の実測による規模は南部で広さ155m、朱雀門南約200mの北部では150mであり、いずれも側溝の内岸（「水沟的内壁」）間での距離であるとされる。
- 7) 井上和人「平城京の実像」『研究論集XIV東アジアの古代都城』2003。
- 8) 奈良市教委『史跡平城京朱雀大路跡』1999。
- 9) 奈文研「左京三条一坊三・四坪の調査―第288次・第290次」『年報1998―III』1998。
- 10) ただし、240大尺（＝288小尺）は、『延喜式左京職式京程』から知られる平安京朱雀大路の築地心間規模280小尺に最も近い10の位での偶数寸尺値であることは注意すべきであろう。なお、注11報告書では、この周辺での発掘調査の成果および遺存地割の状況をもとに、として、築地心間距離を280小尺とする。そして、「280尺の遺存地割は三条一坊のみで、三条大路から南は羅城門まで、ほぼ300尺幅で一定の間隔を保っている。」と記述している。しかし、朱雀大路の遺存地割をみても、三条部分だけが特に狭いという状況はなく、むしろ四条上以南よりも若干広い計測値を得る（三条：90.5m、四条：89.7m、五条：87.5m、六条：88.0m、七条：86.7m、八条、九条は計測不能）。また、遺存地割と発掘調査による検出遺構との関係をみると、ここで検討の対象としている三条では市教委第119次調査での東側溝が遺存地割とほぼ重なる位置にあることを知る。
- 11) 奈文研『平城京朱雀大路発掘調査報告1982』1983。
- 12) 井上和人前掲注5「平城京羅城門再考」。
- 13) 奈文研『平城報告XI―宮城門・大垣の調査』1978。
- 14) 奈文研「II南面大垣―朱雀門東一の調査（第130次）」『昭和56年度平城概報』1982。
- 15) 奈文研「2南面大垣―朱雀門西一の調査 第143次」『昭和57年度平城概報』1983。
- 16) 前掲注2。
- 17) 奈文研「平城宮南面東門（壬生門）の調査」『昭和55年度平城概報』1981。
- 18) 奈文研「IV南面西門（若犬養門）の調査（第133次）」『昭和56年度平城概報』1982。
- 19) 前掲注13。